**いとうせいこう×奥泉 光**

**＜文芸漫談シーズン６＞**

**ドストエフスキー『罪と罰 Part.2』
スヴィドリガイロフ篇**

この企画は、いとうせいこうと奥泉光が、小説の面白さを、笑いを取りながら伝えたいと、漫談形式で始めた文学ライブです。

芥川賞作家と稀代の仕掛人が捨て身でおくる、漫談スタイルの超ブンガク実践講座。

*小説の書き方・読み方がクスクスわかる？かも！*



2006年5月から年3回のシリーズで始まったこの会は、お客様に支えられながら続いてきました。コロナ禍で2年間は自粛しておりましたが、昨年の4月より再開し、今回はその53回目です。会場は演劇の街・下北沢です。

内容、構成はいたってシンプルで、作家・クリエーターとして活躍する“いとうせいこう”と、芥川賞作家であり大学教授の“奥泉光”が、名作と言われる文学作品を笑いを取り入れながら紐解いて行く漫談形式のトークショー（文芸漫談）です。

同類のトークショーのように、作品への理解を与えることにこそ違いはないのですが、そこに、博学がユーモアをまとったような二人の『笑い』が入ることにより、お客さまの興味をより深いところまで誘い、“豊かな文学”になるのでは、との試みです。

今回は「文芸漫談」公演では初めての試みとなる、同じお題での二回目の公演です。

ドストエフスキーの『罪と罰』のパート2、スヴィドリガイロフ篇です。

貧困・孤独・狂気の渦巻く大都会のかたすみに、「理想的な」殺人をたくらむ青年・ラスコーリニコフが住んでいた。酔いどれ役人との出会い、母からの重い手紙、馬が殺される悪夢。

歩いて七百三十歩のアパートに住む金貸しの老女を、彼はなぜ殺さねばならなかったのか・・・。

一方、ラスコーリニコフの妹・ドゥーニャに言い寄っていた女たらしのスヴィドリガイロフは、何故、死ななければならなかったのか？。

「罪と罰」のもう一人の主役に迫ります。

何だ、それなら知っているよ！と、言われる方も、二人の手にかかると、こんな読み方もあったのかと納得いただけるものと思いますよ！

出演■**いとうせいこう／奥泉 光**

日時■**2024年10月11日（金）19：00開場／19：30開演**

料金■全席指定席　予約・当日共　☆3,000円

会場■北沢タウンホール（☎ 03-5478-8006）世田谷区北沢2-8-18

　　　　　　小田急線、京王井の頭線「下北沢駅」東口（中央口）より徒歩5分

ﾁｹｯﾄ問合せ■Ｋ・企画　（TEL＆FAX 03-3419-6318）

　　　　　　　HP < http://www.k-kikaku1996.com/work/bunman/index.html>

　　　　　■イープラス　< https://eplus.jp/>

　　　　　■チケットぴあ　Pコード：653844　< https://t.pia.jp/>

■カルテット予約フォーム

　　　　　　　https://www.quartet-online.net/ticket/bunman-55

主催■舞台よろず相談所 Ｋ・企画

※各種感染予防のため、ご来場の際はご自身での予防対策をお願いします。

　また、37.5度以上の場合はご入場をお控えくださいますようお願い致します。

**罪と罰 Part.2「スヴィドリガイロフ篇」梗概**

　頭脳明晰なラスコーリニコフという青年がいた。頭がよかったが、学費未納で大学から除籍されてしまう。彼はある考えに囚われていた。それは、人間は凡人と非凡人の2種類に分けられる。社会を発展させるため、非凡人は凡人に服従するのが義務であり、非凡人は現状を打破し世界を動かすために、既存の法律を無視してもかまわない。非凡人こそが真の人間であるというものだった。

　そして、自分も「選ばれた非凡人である」という選民思想を持っていた。生活に困窮していた彼は、その思想から「善行として」悪名高い高利貸しの老婆アリョーナを殺害する。ところが、現場を目撃したアリョーナの義妹まで意図せず殺してしまい、ラスコーリニコフは罪の意識から精神を苛まれる。

　予審判事のポルフィーリィは、過去、ラスコーリニコフが執筆した論文に辿り着き、その内容から彼が犯人であると確信。幾度となくラスコーリニコフに迫るも、決定的証拠がないため逃れられてしまう。 　逮捕こそ免れたが、不安定な精神状態から憔悴の度合いを深めていくラスコーリニコフ。だが、そんな中出会った、貧しい家族のために体を売る少女・ソーニャの、自己犠牲をいとわない生き方と、彼女が読み聞かせてくれた聖書に救いを見出す。そして、ソーニャに罪を告白し、自首を決意する。

　情状酌量され、シベリア流刑8年という寛刑に処されたラスコーリニコフ。彼を追ってシベリアに移住するソーニャ。ラスコーリニコフはソーニャへの愛を確信し、人間回帰への道を歩み始めたところで物語は結末を迎える。

　一方、ラスコーリニコフの妹・ドゥーニャに言い寄っていた女たらしのスヴィドリガイロフは、犯した罪に苛まれ、自殺してしまう。

スヴィドリガイロフは、何故、死ななければならなかったのか？。

「罪と罰」のもう一人の主役に迫ります。

**フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー　＜1821年～1881年＞**

ロシア帝国の小説家・思想家。

レフ・トルストイ、イワン・ツルゲーネフと並び、19世紀後半のロシア小説を代表する文豪である。

28歳で空想的社会主義に関係して逮捕されるが、出獄後、代表作である『罪と罰』『白痴』『悪霊』『カラマーゾフの兄弟』などを発表し、「現代の預言書」とまでよばれる文学を創造した。

ドストエフスキーの著作は、世界中で読まれ、170以上の言語に翻訳されている。

ソルジェニーツィンやチェーホフ、ニーチェ、サルトル、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン、日本人では、黒澤明、湯川秀樹、小林秀雄、大江健三郎、村上春樹、三島由紀夫、埴谷雄高などの多くの人物に影響を与えた。

**出演者紹介**

**【いとうせいこう】**

1961年、東京生まれ。早稲田大学法学部卒業。作家、クリエーター。

『ノーライフキング』で小説家としてデビュー。最新小説に『小説禁止令に賛同する』。主な作品に『想像ラジオ』『存在しない小説』『鼻に挟み撃ち他三編』。

ノンフィクション･対談集に『国境なき医師団を見に行く』『ラブという薬』『今夜、笑いの数を数えましょう』などがある。

その他、舞台・音楽・テレビなどで活躍中。

公式HP＝http://www.cubeinc.co.jp/ito/

**【奥泉 光】**

1956年、山形生まれ。国際基督教大学大学院修了。小説家･近畿大学教授。

『石の来歴』で芥川賞、『東京自叙伝』で谷崎賞、最新刊の『雪の階』では柴田錬三郎賞を受賞。

主な小説に『虫樹音楽集』『シューマンの指』『神器　軍艦「橿原」殺人事件』『グランド･ミステリー』など。

いとうせいこうとの共著に『文学の聖典』『世界文学は面白い｡』がある。

公式HP＝http://www.okuizumi.com/